

Title	日露戦争期における欧米の「日本」表象：人種主義と文明化に着目して
Author(s)	飯倉, 章
Citation	2009 年度 博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2579
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

2009 年度

博士論文（要旨）

日露戦争期における欧米の「日本」表象

——人種主義と文明化に着目して——

飯倉 章

博士論文の要旨

19世紀に西洋列強諸国は、国民国家としてさらなる統合を進めながら、資本主義の興隆に支えられて目覚ましく発展し、1870年代からは帝国主義列強として世界の植民地支配に乗り出した。これらの人種的に見れば白人の西洋列強諸国は、人種によって能力に差がありしかも白人をもっとも優れた人種と見なす人種主義のイデオロギーと、人種的に劣るとされた非白人のアジア・アフリカなどの人々に文明の恩恵を授けることは使命であるとする文明化の使命意識に支えられて、帝国主義的進出を果たし、また帝国主義支配を正当化していた。そのようななかで明治維新に前後して近代化に着手した日本は、国内を国民国家として統合する一方で、西洋文明を積極的に受容し、非白人の帝国主義国家としても発展を続けた。そのような発展途上の帝国主義パワーの日本が、ヨーロッパの白人国家であるロシアと、韓国と満州の支配をめぐる戦ったのが日露戦争であった。日露戦争期には日本をめぐる報道が、欧米のメディアを賑わせ、「日本」表象が噴出した。それらの表象は、歴史的コンテクスト、それぞれの国々の立場・事情を反映して多様であり、また人種主義と文明化の言説に強く影響されるとともに、それらの言説を浮き彫りにするものでもあった。本論文の目的は、人種主義と文明化の言説に着目しながら、日露戦争期の欧米の新聞・雑誌等のメディアに表象された日本像の内容と特徴を明らかにすることにある。戦争の過程で現われた「日本」表象は、当時の支配文化である西洋の帝国主義的文化のなかで知と権力が結びつく形で形成され、そのような文化の一部を構成したものであると思われる。

本論文では、人種主義については、「黄禍」の言説を中心に検討を進めた。確かに「黄禍」論は人種主義の言説の一部に過ぎない。しかし、この時期の欧米の言論における一つの特徴としては、人々の内面に根を下ろしていてもなかなか表面化しない場合が多い人種主義が、「黄禍」という主題によって顕在化したことが挙げられる。この時期の「日本」表象を人種主義に着目して検討する際に「黄禍」の問題が中心となるのは、研究上の恣意的な主題の選択によるのではなく、このような特徴を踏まえてのことである。

本論文では序論で本論文の目的と方法論を明示し、ついで第1章で、人種主義・帝国主義の時代における「黄禍」の誕生と展開について論じた。なかでも「黄禍」論を喧伝するのに大きな役割を果たしたドイツ皇帝ヴィルヘルム二世と「黄禍」思想との関係を詳しく検討した。ついで第2章では、日露戦争中の「黄禍」論争を取り上げた。この章ではまず日露戦争の性格規定と戦争原因を最新の研究成果を基に概説し、この戦争を理解するフレームワークを作り、ついで国際論争化した「黄禍」論争を英米仏独露の報道を基にして賛

否両論ともども吟味した。第3章においては、「文明」と「人種」から日露戦争を見直し、「日本」表象をめぐる文明化とパターナリズムの問題、日露の二分法がもたらした理想化された日本像、国際法を順守する形での日本の「文明戦争」の遂行とその限界、さらに日露戦争を「人種戦争」とする見方について論じた。第4章では、諷刺画を素材として、「黄禍」「文明」あるいは「西洋の教師」として表象された日本像を明らかにした。第5章では、人種主義、とくに「黄禍」論が近代日本外交に与えた影響を政策決定に着目しながら検討した。結語では、過去から現代にまで連なる問題として「黄禍」の言説を吟味し、これまでの論考を基に人種主義と文明化からみた日露戦争期の「日本」表象の特徴をまとめた。

人種主義の観点から見れば、この時期の日本は、19世紀末から本格的に喧伝され始めた黄色人種の連合の脅威を意味する「黄禍」との関連で表象された。白人国家のロシアと黄色人種の国家の日本との戦いという構図は、日露戦争を「黄禍」を実証する事件であるかのように捉える見方を生んだ。この頃の「黄禍」論の中心主題は、膨大な人口と資源を有する中国の覚醒（近代化）の問題であり、戦争に勝った場合に日本はその先頭に立って中国を覚醒させると恐れられたのである。そのような見方に立脚する、「黄禍」を主導する存在としての日本像は、ロシア、ロシアの同盟国フランス、皇帝ヴィルヘルム二世が「黄禍」論を喧伝していたドイツで現われた。一方で、このような「黄禍」論に対しては、日本の同盟国イギリスや日本の保護者を自任していた友好国アメリカを中心に反論がなされたが、反論の論拠の一つは日本は「文明国」である、あるいは「西洋文明」の側にあるとするものであった。「黄禍」を文明に対する脅威とする論法に対しては、日本が「文明国」で「文明」の側にあるという主張は有効な反論となりえた。しかし、問題はそう判断する論拠が多分に現実とは別の次元で言説として展開されたことであろう。

このように「黄禍」と「文明（化）」をめぐる日露戦争期には国際論争が展開されたのであるが、なかでも日本とロシアを比較する戦争初期の議論においては、二分法のなかからロシアが野蛮な専制国家として表象される一方で、アジアの非白人の新興国日本が「西洋文明」の代表として理想化された形で表象された。そのような表象を可能としたのは、日本を西洋の生徒／弟子／被保護者としてみるパターナリスティックな見方であり、それは戦争初期にとくに強く現われたもので、西洋列強諸国に共通した見方でもあった。文明化の言説から見れば、西洋の弟子の日本が、進歩から遅れたロシアに対して文明のための戦いを遂行していると考えられたのである。「黄禍」論に代表される人種主義の言説からすれば、それは生徒／弟子の裏切りであり反逆であり、そこから「裏切りをする国」として

の日本表象が生まれた。ただ、双方の言説の底流には共通する認識としてパターンリズムが見受けられるのである。

海陸の数々の戦いにおける日本の軍事的成功は、西洋の既存の日本像に様々な形で影響を与えた。ドイツやフランスといった大陸ヨーロッパにおいては、日本の勝利は「黄禍」の現実化の前兆として受けとめられた。とくにフランスにおいては、フランス領インドシナへの脅威という具体性を持って「黄禍」の脅威が語られた。またドイツにおいてカイザーは、この戦争を「人種戦争」と解釈して（そのような見方はあまり広まりはしなかったが）、戦争後期にはロシアからアメリカに「黄禍」日本を防ぐ役割を期待するようになり、アメリカを教唆する言動を繰り返した。

「黄禍」という考えは、黄色人種の連合という脅威を制御しようとする目的意識を持ち、そのために都合のよい現実の姿を提示した一つの言説であったと言えるだろう。エドワード・サイードはその著作『オリエンタリズム』のなかで、オリエンタリズムの言説が、政治権力、知的権力、文化的権力、道徳的権力といったさまざまな種類の権力との不規則なやり取りの過程のなかで生産され存在し、それらとのやり取りで大いに形作られたとした。このようなオリエンタリズムの言説の特徴は、かなりの部分「黄禍」論についても当てはまる。「黄禍」論が、政治権力との関わりでは、カイザーや露仏独の政府関係者に鼓吹されたこと、知的権力との関わりでは当時優勢であった疑似科学的人種主義の力を借りたりフランスのアカデミズムがこれを唱道したこと、道徳的権力との関わりでは『我々』[西洋人]のようには『彼ら』には行動も理解もできない」という考えから黄色人種の勃興を恐れたこと、などにこのことは現われている。そしてオリエンタリズムが、「オリентよりむしろ『我々の』世界の方により深い関係を有するもの」であるということは、「黄禍」論にも言えるだろう。「黄禍」論の主張も、それに対する反駁も、つまるところは黄色人種の「彼ら」について語っているように見えて、実のところは西洋世界により深い関係を有しており、西洋諸国や論者がそれぞれ望む自己像や在り方を明らかにしているのである。それは、カイザーの寓意画のなかでアジアの象徴よりもヨーロッパ諸国の関係が詳細に描かれたことや、イギリスに対する牽制やアメリカへの教唆のために「黄禍」が利用されたことや、英米における日本の側に立っての反論のなかにも、たとえば門戸開放政策を日本に押しつけるような側面があったことなどに現われている。しかし「黄禍」論はオリエンタリズムの言説が持ちえたような力や「恐るべき持続力」を持ちえたとは言えない。その理由の一つは、「相互参照性」の欠如であろう。相互参照を可能とする「正統派的学説や古典」が、

「黄禍」論にはほとんど見当たらないのである。換言すれば、「伝統的な学問」「公的な諸制度」「特定の種類の作品」と結びついて効果を発揮する、オリエンタリズムが持つような「累積的・集合的本質」を持つには「黄禍」論は至らなかつたと言えよう。

結果的に「黄禍」論は西洋列強の行動に大きな影響を与えたとは思えないが、日本外交には逆説的な効果を及ぼしたのではないかと思われる。一つに、「黄禍」論に代表されるような人種主義に対する懸念があつて、日本外交はより慎重で抑制的なものになつたと考えられる。明治政府の指導者たちは、「黄禍」と見なされる行動をとつて、列強の共同干渉を招くことを強く恐れ、たとえば開戦直前の閣議で清国の参戦の可否が検討されたときには、「黄禍」の懸念を生むということもあり中立を守らせる決定がなされた。日本が日露戦争中、国際法を遵守する「文明戦争」を遂行したことにも、「黄禍」論のような人種主義に対する懸念が要因として働いたためとも言えなくはない。さらに、「黄禍」論と、それへの反動としての国内における排外主義の惹起に対する警戒心は、日本の指導者をして、アジア主義ではなく、欧米との協調へと日本をさらに向かわせたとも言えるだろう。1902年に締結され日露戦争末期に改訂強化された日英同盟にしても、人種主義の影響を懸念していた日本外交から見ると、「人種的孤立」を回避するという意義を持っていたと言える。

戦争後期、英米においては、依然として「黄禍」論への反論が続いたが、その一方で、日本を西洋文明の代表とするような言説は影をひそめ、西洋文明とは異質な要素をもつ新興の強国として日本は表象されるようになり、そのような様子は新聞・雑誌の記事や諷刺画にも見て取れる。衰退期にあり社会改良に対する関心が高まっていたイギリスにおいては、新興の異質な強国日本を「効率性」のシンボルとして捉え、その武士道や愛国主義から学ぼうという動きが現われる。軍事面でも似たような動きはあり、他のヨーロッパ諸国も含め、日本は「西洋の教師」とまで見なされる場合があつた。一方、新興の大国で太平洋を挟んで日本と対峙するアメリカにおいては、日本を異質性を帯びたライバルとする見方が広がって行く。

日露戦争期に現われた欧米の「日本」表象は、「西洋文明の代表」から「黄禍」もしくは「黄禍の先導者」まで、あるいは「文明の生徒」から「西洋の教師」まで、「国際法の優等生」から「裏切りをする国」まで、「被保護国」から「ライバル」あるいは「異質な強国」まで、幅広く存在した。これらの表象の多様性は、欧米の多様性の反映であり、日本そのものよりも西洋世界と「日本」表象がより深い関係をもっていたことを裏付けていると言えよう。

